

貴州省における日本関係典籍について

—黎庶昌の古典籍蒐集およびその旧蔵書の行方を中心として—

陳 捷

日本女子大学

2000年12月24日から30日の20世紀の最後の一週間において、多田伊織女士（白鳳女子短期大学）とともに雲南省昆明市、貴州省貴陽市で文献調査を行った。伝統的な春節より人出が多かったと言われる、白熱したクリスマスムードで始まった今回の調査で、雲南省社会科学院図書館、雲南大学図書館、雲南師範大学図書館、貴州省図書館、貴州省博物館、貴州師範大学図書館など六ヶ所の図書館・博物館で調査を行った。また、各図書館・博物館のスタッフとの懇談や、社会科学院・大学に所属する現地の研究者との交流も行われ、有益かつ充実した年末を過ごすことができた。昆明での調査は多田伊織女士が報告されるため、ここでは、貴陽市での調査の概要を報告することとした。

1. 調査の日時および調査箇所

今回の貴陽市での調査は、12月27日夜に貴陽市に到着し、30日早朝8時の飛行機で帰国するというハードスケジュールであったが、貴州師範大学歴史系教授張新民先生を始めとする現地の先生方のご協力で、スムーズに行うことができた。今回は「中国に伝存する日本関係典籍と文化財の総合調査」開始以来初めての貴州での調査であり、時間も極めて限られていたため、調査の重点は当地域の重要な文献収蔵機関の概況および駐日公使として2度にわたり日本を訪れた黎庶昌関係の文献とその旧蔵書の行方の2点に絞られることとなった。

12月27日、張新民先生は学生2人とともに空港までお出迎え下さり、その晩、歴史系の副主任の馬先生も加わり、夕食をとりつつ、貴陽市滞在中の調査スケジュールについて打ち合わせをした。滞在期間が短いため、張新民先生指導の大学院生である張明・田景星の両氏も調査をお手伝いして下さることとなった。翌28日は早朝から昼過ぎまで貴州省図書館および貴州師範大学図書館を調査し、午後、貴州師範大学歴史研究所の先生および大学院生と交流会を開いた。29日、張新民先生とともに貴州省博物館を訪問し、龔正英女士に当館所蔵の書籍の基本状況を説明して頂き、黎庶昌自筆本などの貴重な文献を拝見することができた。また、この日、『黎庶昌評伝』の著者であり、貴州省の歴史文化に詳しい、貴州省社会科学院の黄万機先生にもお会いすることができ、先生から黎庶昌・陳矩など、貴州省出身の蔵書家の旧蔵書の行方などについてご教示を頂いた。

12月28日に訪問した貴州省図書館は貴州省最大の図書館であり、その前身は1937年5月に成立した貴州省立図書館（貴陽市棉花路、現在の科学路）である。貴州省人民図書館（1950年7月）、貴州省貴陽図書館（1952年10月）などの名称の変遷を経て、1953年11月に正式に現在の名前に改められた。50年代以降、私人蔵書家の寄贈や図書館の図書募集キャンペーンなどにより、図書館所蔵の古典籍や地方文献は大幅に増加した。現在、蔵書は200万冊以上に達し、古籍図書22万冊、うち善本図書1万3千冊、『全国古籍善本書総目』を編集する際に善本基準に達していた貴重書は160点もあるという。現在は新館の建設中のため、善本書の閲覧は中止されているが、普通書と線装本は貴州師範大学図書館の一フロアーを借りて、館内閲覧の業務を続けている。

12月29日に訪問した貴州省博物館は1958年に開館し、現在では出土資料と伝世資料合わせて6万点の収蔵品を有する、省内最大の博物館である。文化財として扱われる書画作品は2485点、貴重書は85点、そのなかには、唐写本『大般若波羅密多經』、北宋写本『仏説慶許摩訶帝經』や北宋韓琦信札巻などの極めて貴重なものも含まれている。収蔵品の目録は公開されていないが、『貴州省博物館蔵品志』（貴州人民出版社、1990年）の他、1985年6月に創刊された『貴州省博物館館刊』やその増刊として出版された『貴州文物考古博物館文献目録』等により、その収蔵品の一斑を窺うことができる。

2. 調査地域の概況と日本関係資料の伝存状況

貴州省は中国西南地方に位置し、宋元時代以来、独自の文化を持ちつづけると同時に、中原地方および四川などの、文化の発達した地区との交流も盛んであった。交通の不便さなどの原因で、中原や江南地方に出版された書物が貴州に伝わるのには不便な点もあったが、その分、貴州出身の知識人は書物を大切に、書物を集めることへの執念も強かったのである。また、明清時代、貴州地方では出版も盛んに行われていた。なお、辺境で、中央政府の統制が比較的弱かったため、政治的な理由で厳しく取り締まられていた禁書も、この地域には残されている例が多くあり、特に兵書などに稀覯書が多く見られる。明清時代には、書院・寺院等の蔵書の歴史もあり、清代中期以後、黎恂、鄭珍、莫友芝など全国的に著名な蔵書家も現われた。近代以降、私人蔵書家が輩出すると同時に、各地方図書館、公立図書館および大学図書館が近代化の一環として建設された。1937年5月に成立した貴州省立図書館は、1949年には5万冊の蔵書を持つ省内の随一の図書館となっていた。その他、貴陽医学院図書館（1938年）、貴陽師範学院図書館（1941年）、貴州大学図書館（1942年）などの大学図書館も合計4万冊に近い蔵書を持っていた。また、日中戦争の間、疎開していた浙江大学、大夏大学の蔵書も貴州地方の図書館事業に大きな影響を与えた。新中国成立以後、所属機関の変化や数多くの政治運動の影響などにより、各公立図書館、大学図書館の蔵書には分散、合併、図書の移転などの大きな変化がもたらされることとなった。例えば、1954年、全国的に実施された大学の調整により、貴州大学は廃校になり、旧貴州大学図書館の蔵書も雲南大学図書館に移送された。今回雲南大学図書館の調査中、度々目にした「一九五四貴州大学撥交雲南大

学」の朱印を押された書物はその際に移送されたものである。貴州省内では、私人蔵書家の寄贈や文献募集キャンペーンなどによって、古典籍は貴州省図書館などの重要な図書館に集中し、また、蔵書の特徴としては、地方文献や、貴州省出身・寄寓の著名な文化人の著作や自筆本などが多数収蔵されていることが挙げられる。

近代以降、貴州出身の多くの人々が日本と関わりがあり、交通不便な土地でありながらも、日本の書籍が様々なルートを通してこの地域に持ち込まれていた。例えば、遵義出身の黎庶昌は、1882年（明治15）と1887年（明治20）の2度、駐日公使として日本に渡り、帰国した際、日本で入手した南蔵大蔵経や『一切経音義』を持ち帰り、自分が少年時代から勉強していた禹門寺に寄贈した。また、自宅に拙尊園蔵書楼を建て、その蔵書は10万巻ほどあったと言われている¹。なお、黎庶昌の赴任の際に随員として同行した、同郷の知友・親戚である陳矩・黎汝謙なども、日本の文献や日本事情の探索に熱心であった。このような日本と関係のあった人々の努力や、近代的な学校や図書館の建設などによって、日本の文献資料が多く輸入され、各図書館には近代以来輸入された自然科学や社会科学関係の日本語書籍が数多く収蔵されており、和刻本漢籍や明治時代以前の日本書もある程度収蔵されている。

3. 黎庶昌とその日本滞在中の古典籍蒐集

黎庶昌（1837～1898）は貴州遵義の人であり、家はもともと貴州の名門で、その邸宅の中には鋤經堂という蔵書楼があり、祖父黎安理、叔父黎恂の代から集められていた蔵書は3万冊、7,8万巻に上り、貴州有数の大蔵書家であった。親戚であり、少年時代の師でもあった鄭珍の巢經室にも蔵書5,6万巻があり、親戚の莫友芝も清末有数の書誌学者で、その影山草堂にも数万巻の蔵書が収められていた²。このような環境の中で暮らしていた黎庶昌は、書物の価値をよく理解していた。郭嵩燾の随員としてヨーロッパに駐在していたときに書かれた『西洋雑誌』を見れば判るように、彼は中央アジアの状況を考察するために、中央アジアやシベリア関係の資料を積極的に集めていた。1882年（明治15）2月、駐日公使に就任し、1885年（明治18）2月に母親が亡くなったため一旦帰国したが、1887年（明治20）9月に再び来日、明治23年（1890）まで滞在し、日本滞在期間は前後6年にも及んでいる。日本滞在中、外交業務の傍ら、日本の各界の有識者と交流を深め、日本の歴史・社会・思想など多分野の文献を積極的に蒐集した³。また彼は、楊守敬の訪書計画に全面的に協力し、中国の古典籍の蒐集と『古逸叢書』の編纂・出版にも積極的にかかわっていた⁴。

遊歴使として日本を訪れた傅雲龍の『遊歴日本図経余紀』後編において、彼は黎庶昌に貴重な古書を見せてもらったことについて次のように述べている⁵。

黎大臣出視『須真經』（自注：其經似是上中下三軸。此卷中一軸也。曰『答法義品第二』、『法純叔品第三』、『声聞品第四』、『元畏品第五』）。其後跋一十三行。（中略）又見日本秘閣金沢文庫古鈔本『春秋経伝集解』三十巻、毎紙十六行、行十二字、字寛八分半、葉高尺六寸有奇。（中略）黎大臣有光緒九年校於杜注補輯本。又視其新購『白氏文集』七十巻、

亦日本活字本、与婦滂喜斎一部同。

ここで触れられている『須真經』は後の跋文によれば、768年（神護景雲2）の写経で、後述の『拙尊園存書目』法帖項に「日本唐写須真天子經」として著録されている。金沢文庫古鈔本『春秋經伝集解』とは、紅葉山文庫に所蔵されていた金沢文庫旧蔵の古卷子本であり、黎庶昌の1回目の在任中に楊守敬の努力と修史館書記官であった巖谷修の特別の配慮により、一ヶ月の期限付きで借出して影写したものである⁶。また、その際には、黎庶昌も古鈔本の内容を全部記録したようである。「新購白氏文集」に関しては、黎庶昌『拙尊園叢稿』に「跋日本活字版白氏文集」と題する跋文が収められているが、これは難波道円の活字本である。これらの記録から、黎庶昌が古典籍の蒐集に熱心であり、日頃から公使館のスタッフや公使館の訪問者と切磋琢磨していたことが窺われる。

4. 黎庶昌の蔵書とその行方

黎庶昌が帰国後に建てた拙尊園蔵書楼の蔵書は10万卷もあったと言われているが⁷、その蔵書は纏まった形では残されていない。しかしながら、現在貴州省博物館に収蔵されている黎庶昌の蔵書目録の稿本から、そのコレクションの一斑を窺うことができる⁸。この目録は『拙尊園存書目』と題されており、元来上中下3冊からなるものだったと思われるが、現在では上下2冊のみが残されている。上冊には經史子3部の書物を収め、下冊は經学叢書、日本人著書、隨身書籍、重複之書、寄存禹門寺書籍、碑帖目録、法帖、字画などの項目に分けられている。「日本人著書」の項目には58点が挙げられており、『大日本史』『書紀集解』『国史紀事本末』など日本史関係の書物が15点、日本人の書いた中国古典の注釈書が5点、年表1点、『聿修堂医学叢書』1セット13点の他は、殆ど黎庶昌と交際のあった日本人およびその関係者の著作、24点である。これらは著者あるいはその知人から贈られたものだと思う。なお、これらの書物のもう一つの特徴は、漢文で書かれたものが多いことで、これは、当時の清国公使館員によって購入された書物に共通する特徴である。先に触れた、傅雲龍に見せた『須真經』は法帖の項目において「日本唐写須真天子經一卷」として著録されており、また、同項目に「日本唐写楞伽經注一本」も著録されていることから、これらの写経は黎庶昌の目には書画作品として認識されていたことが窺える。

『拙尊園存書目』に収められた書物の内容とその数量から考えて、恐らく目録を編集する以前に、書物はすでに散逸し始めていたと思われる。「存書目」というタイトルからも、このような事情を窺うことが出来るのである。また、「此卷已售去」などの注記から窺えるように、目録を作成した後も売却することがあったと思われる。黎庶昌の死後、その一族も次第に没落していき、旧蔵書の一部はその後、子孫によって四川成都崇慶県の龔沢浦に売却されてしまった。更に1951年には「惡霸地主」とされた龔沢浦の全財産とともに没収され、翌年には四川省図書館の収蔵となったという⁹。また、家に残った書物の一部は1958年に四川省重慶の古書店と湖南省長沙の書肆によって購入されたが、その量は馬車数台分もあったといわれて

いる。このとき売りに出されなかったものは、一部流失したほか、文化大革命の時に焼かれてしまったと記されている¹⁰。また、貴州省社会科学院の黄万機先生によれば、黎家に秘蔵されていた、黎庶昌の息子黎尹驄が集めた古銭類などは、四清運動の際に村にやってきた工作隊の人によって持ち出されてしまったという。時代の変遷と現代中国のたびたびの政治運動の中で、黎家の収蔵の受けた被害は想像を絶するものであったろう。しかしながら、水、火、戦争など自然災害や人的な被害に弱い書物は時に人間の想像を超えた生命力を持っている。例えば、貴州省博物館には、先述の蔵書目録『拙尊園存書目』の他、黎庶昌の稿本『牂柯故事』¹¹や『全黔国故頌』¹²などが所蔵されており、更に、黎庶昌の弟・黎庶誠旧蔵の『古逸叢書』も所蔵されている。度々の社会の混乱や政治運動を乗り越えてきた書物の生命力を感じさせると同時に、様々な苦難の中、この土地の文化財産を大切に保存しつづけてきた人々の努力にも感嘆させられる。なお、これらの由緒正しい書物が残されていることから推測して、黎庶昌旧蔵書の中にもたびたびの災難から逃れられたものがあるのではないかと考えられる。

5. 調査所見、今後の調査に際しての課題、問題点

今回の調査は時間の関係で、その範囲と閲覧できた書物は限られていたが、現地の研究者や訪問先の図書館・博物館の方々のご協力を頂いたお陰で、貴州省の古典籍所蔵機関に関する有益な知識を得ることができた。個別の文献に関する新知見の他、今回の調査の印象と今後の調査に際しての課題を以下に挙げておきたい。

貴州省は中国西南地方の交通不便な地域に位置するにもかかわらず、歴代、とくに清中期以来の知識人の努力によって、特色有り、かつ豊富な古典籍が収蔵されている。これらの書物は貴州省図書館を始め、貴州省博物館、貴州師範大学図書館、貴州大学図書館などの図書館や博物館に収められており、また、各地方の公立図書館や資料館にも、地方の文化人などに関連した貴重な文献が所蔵されている¹³。これらの文献の整理と保存は、近年、各図書館の方々の努力によってかなり進められているが、冊子本の蔵書目録はなく、殆どの図書館が完全な目録を有していないのが現状である。

また、以上の記述からも窺えるように、中国近代社会の激変の中、貴州省の文献収蔵の状況も複雑な様相を呈している。そのため、清末や民国時代の目録や記録は、現在の図書収蔵状況と大きな相異があると思われる。また、同じ理由から、黎庶昌や陳矩のような清末の蔵書家の旧蔵書の行方を追跡することは非常に困難だと考えられるのである。

以上のことから、この地域の調査に際して、本研究課題の参加者の派遣と同時に、貴州地方の文献の移動状況や現在の各図書館の所蔵状況に詳しい、現地の研究者や図書館員の協力が不可欠であると思われる。今回の短い調査期間の中でも、貴州師範大学歴史研究所、貴州社会科学院や図書館、博物館の先生方と有益な交流を持つことができたが、今後、現地の研究者と図書館関係者を加えることによって、より完全な調査成果を得ることが期待される。

今回の調査においては、貴州師範大学歴史研究所張新民先生、貴州省社会科学院黄万機先生、貴州省博物館の龔正英先生および貴州師範大学歴史研究所大学院生の張明・田景星の両氏によるご教示・ご協力を頂くことができた。末尾ながら感謝の意を申し上げる次第である。

注

1. 『遵義市志』（中華書局、1998年）。
2. 莫友芝は黎庶昌のいとこであり、また、曾國藩の幕府においても同僚であった。黎・莫両家は密接な関係にあり、莫友芝の死後、息子の莫繩孫がその遺集を編纂した際、黎庶昌に校閲を依頼している。
3. 例えば、黎庶昌の帰国前に、漢学者の塩谷時敏は彼を送る文章において、「君駐京既久、公務之余、日与僚佐署員考究我歴史世書地誌、分類編摩。古今沿革、朝野習俗、具举並載、或無遺漏。於是国勢民情瞭然如指掌」と述べている。塩谷時敏「奉送黎大使帰国序」『庚寅譙集三編』卷下『題襟集』。
4. 楊守敬『日本訪書志』序、『隣蘇老人年譜』など。
5. 『遊歴日本図経余紀』後編、光緒14年1月22日。
6. 影写金沢文庫旧藏鎌倉時代旧鈔卷子本『春秋経伝集解』楊守敬跋、王重民輯『日本訪書志補』pp.8-10、阿部隆一『（増訂）中国訪書志』（汲古書院、1983年）pp.173。
7. 『遵義市志』（中華書局、1998年）。
8. 石田肇『「拙尊園存書目」—黎庶昌の蔵書目録』、『群馬大学教育学部紀要』人文・社会科学編第49巻（2000年）、pp.13-60；「黎庶昌の蔵書—「拙尊園存書目」について」『汲古』第38号（平成12年12月）。なお、筆者の調査によれば、中国国家図書館にもう一点の黎庶昌の蔵書目録『拙尊園存書目』（写本、一冊）が所蔵されている。その内容および貴州省博物館所蔵本との異同については、別の機会に紹介したい。
9. 劉雨濤「龔沢浦購買黎庶昌珍藏善本書」、『貴州文史叢刊』1992年第3期。
10. 文受剛「黎庶昌遺留的幾件文物」、『遵義県文物誌』第1集、遵義県文物管理委員会編、1983年。
11. 黎庶昌撰、自筆本、24冊。建置、考証、雜記、陰要、名勝、古蹟、金石、冢墓、歴史人物、本朝人物、列女、紀事、農、桑、水利、物産、苗蛮種類、土司などの項目ごとに記述された貴州の地方志。未刊。
12. 黎庶昌撰、自筆本、7冊、うち第6冊欠。晋代から清にかけての貴州出身の名人110人の伝記を名臣、忠義、循吏、儒林などの項目順に編纂したものである。未刊。
13. 例えば、黎庶昌の故郷である遵義市にある遵義市図書館は、線装古籍2万冊を所蔵しており、鄭珍・莫友芝と黎庶昌の自筆本の他、国家級の善本図書が11点、249冊所蔵されている。